



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

岩本, 武和

---

CITATION:

岩本, 武和. はじめに. 岩本ゼミナール機関誌 2009, 13: 2-4

ISSUE DATE:

2009-03-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/109832>

RIGHT:

はじめに

14期生のみなさん、卒業おめでとうございます。ゼミ長の嶋田君、青竹会の準備も含め、よくみんなをまとめてくれました。先生お気に入りのチョコレートを選んでくれたり、人差し指の思い出が忘れがたい近藤さん、いつも真摯で礼儀正しい上甲君、大学院へ進学するアカデミックリーダーの今江君と新宅君、留学生でよくがんばった劉さんと謝さん、これからの日銀での活躍が楽しみな平石君、去年はゼミ単位要らない、今年は要るから待ってくれとわがままな大塚君、この期もみんな個性的で、濃密な時間が共有できたことに感謝します。

1年遅れで卒業の真戸原君、金沢料理に感激してくれて以来、私の大好きなキャラクターになりました。松田君は長いヨーロッパ放浪の末に見いだしたのが、この国の舵取り役。入ったときはどうなるかと思った中野さんも、然るべきところに落ち着きました。皆さんのこれからの活躍が、岩本ゼミのステイタスを上げてくれるものと確信しています。

卒業生の皆さんにも変化が多い1年でした。3期生の前田奈都子さんと、大学院から入った田中珠雅紫さんが結婚したり、5期生の北澤(旧姓桑原)朋子さんに子どもが生まれたりした知らせには驚きました。もっと驚いたのは、8期生の河村知晴君と9期生の杉七菜子さんの、ゼミ生同士では初めてのカップルが誕生したことでした。5期生の藤嶋正信君(財務省)は中国留学が長く、同じく財務省の藤中康生君(7期生)はイギリス留学から帰ったら思ったらまた英国財務省に派遣、日銀の沓脱誠君(9期生)は、来年度から留学、長らくTAをやってくれた荒戸寛樹君は **ph.D** を取得して一橋大学へ就職決定……。いつもながら「青は藍より出でて藍より青し」を実感しています。

私は、2008年4月から評議員(副研究科長)に選出され、10月の総長交代に伴う副学長(理事)の入れ替えによって、企画評価担当理事直属の全学委員に任命されたことで、教育研究という大学教員としてのレーゾンデトールが奪われる日々の連続でした。あと1年はこういう苦しい日々が続きそうです。

ただ、来年度から国際貿易の准教授が着任することになり、また開発経済学の教員も応募が決まり、これまで1人でやってきた「国際経済学」を「国際貿易論」「国際金融論」「開発経済学」の3人体制でやっていける目途がたちました。その意味では長年の夢が実現したと言えるでしょう。

ところで、世界同時不況にまで発展した金融危機は、経済学のロジックで解明され尽くす必要があるのですが、ここまで来ると、規制とか管理の問題を超えて、倫理とか公共性

の問題にまで踏み込まざるを得ないのではないのかと思うようになりました。生命を扱う医学部の学生にも、自由や人権を守る法学部の学生にも、高い倫理性が求められているように、自由や財産を扱う経済学部の学生にも、それに相応しい倫理教育が必要になってきているのではないのか。小泉元首相の「自民党をぶっ壊す」との公言は、カッコよく、故事来歴や慣習に捕らわれている組織の改革には必要な武勇の精神です。しかし、市場原理によって社会を活性化させることは必要だが、競争によって社会システムそれ自体を破壊することのない寛容の精神も必要です。

プロテスタンティズムの職業倫理(禁欲的労働)は、資本主義の精神に適合していた(例えば、労働によって蓄積されたカネは、禁欲的であるから浪費されることはなく、再び営利追求のために再投資される)が、近代化とともに職業倫理を喪失した資本主義は、営利追求それ自体が自己目的化するようになった、という歴史的逆説を説いたマックス・ウェーバーは、『プロ倫』の最後で、次のような有名な一節を書いています。

「勝利をとげた資本主義は、機械の基礎の上に立って以来、禁欲の精神という支柱をもう必要としない。天職義務の思想はかつての宗教的信仰の亡霊として、われわれの生活の中を徘徊しているに過ぎない。営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格を帯びることさえ稀ではない。・・・こうした文化発展の最後に現われる末裔たちにとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。精神なき専門人、心情なき享楽人、この無のものは、人間性のかつて達したことのない段階にまですでにのぼりつめた、と自惚れるだろう。」

卒業する14期生や、すでに卒業生したみなさんは、日々それぞれの現場で競争にさられ、色々な意味で業績を求められるはずです。大学人である私も同じです。文部科学省は大学の機能分化(「比較優位の原理」に基づく大学間分業)を大学という組織改革の視点とし、もちろん京都大学は国際競争力のある研究成果に特化することが求められています。これらは、ある意味で禁欲的でさえありますが、他方で盲目的でもあり、「見ないで行こう」という場面にも多く遭遇します。そのとき、やはりウェーバーの次の言葉(先の『プロ倫』最後の言葉の少し前)は、非常に効果的です。

「専門の仕事への専念と、それに伴うファウスト的な人間の全面性からの断念は、現今の世界ではすべて価値ある行為の前提であって、業績と断念は、今日ではどうしても切り離しえないものとなっている。この認識は、豊かで美しい人間性の時代からの断念を伴う決別を意味した。ピューリタンは職業人たらんと欲した—われわれは職業人たらざるをえない。」

この言葉は、「ファウスト的な人間の全面性、豊かで美しい人間性の時代からの断念を伴う決別」を、職業倫理(禁欲的労働)として肯定しているのか？ あるいはピューリタンの末裔たる「精神なき専門人、心情なき享楽人」として否定しているのか？ 私は時に応じて勝手に使い分けています。日々の仕事は禁欲的に、時には一呼吸おいて豊かで美しいファ

ウスト的な人間の全面性とは何かを振り返る。そのくらいの「使い分け」ができる、ないしは「ゆとり」をもってアクセルを踏むことができるようにしたいと思っています。

2009年3月10日

岩本 武和